

December

号外
2020過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞上町台地
今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム

vol.13 & 14 Document



発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング
 問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL弘本)
 ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)



会場はうえほんまち銭屋ホール、能舞台形式で、彼岸と此岸が交錯する、今回のテーマにふさわしい舞台設定が実現しました。

上町台地 今昔フォーラムvol.13&14を会場参加とオンラインを併用して開催、約80名が集いました。「プロローグ」で、モダン大阪の新星たちが生きた時代へタイムトリップ。「イマジン・トークその1」で、橋爪節也先生に“エコール・ド・大阪”ともいえるべき、当時の時代精神とアーティストが果たした役割についてお話いただき、「イマジン・トークその2」のセッションへ。約1世紀前の災禍と祝祭を生きた新星たちとの出会いから、視点を現在へ転じ、ポストコロナの真の“レガシー”とは何なのか、7人のオンライン・コメンテーターの方々に地域の最前線から声を届けていただき、また若きアーティスト池田真優さんが未来への想いを語ってくださいました。時間・空間を越えた対話を通して、未来に何を手渡していくことができるのか。過去と未来、リアルとヴァーチャルが、今ここで混じりあう、またとない場をみなさまと共有する試みとなりました。

上町台地 今昔フォーラムVOL.13 & 14を会場・オンライン併用で開催！
 イマジン・トーク(会場/オンライン)
 大阪の原点・上町台地から、ポストコロナの真の“レガシー”に迫る
 災禍と祝祭を生きたモダン大阪の新星たちは、
 今、何を語ってくれるだろうか



▲「上町台地 今昔タイムズ」第13号(1面)

▲「上町台地 今昔タイムズ」第14号(1面)

「上町台地 今昔タイムズ」*vol.13では、博覧会百年の計を背景に、近代都市・大阪の揺籃期、激変する社会の中で新たな時代精神を切り拓いた若き才能たちに着目。続くvol.14では、都市形成のもう一方の極にあった災害史に目を向けました。モダン大阪の新星たちは、まさに災禍と祝祭の垣根を生き、新たな思想や技術を受け入れ、カオスの中から時代を先駆ける文化を生み出していたのです。

*プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」[U-CoRo]で検索してご覧いただけます。



■日時: 2020年10月4日(土) 14:00 ~ 17:15

■会場: うえほんまち銭屋ホール
 (大阪市天王寺区石ヶ辻町14-2 銭屋本舗南館6階)

オンライン: Zoom (Web会議システム)

■主催: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)

企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング

協力: 株式会社銭屋本舗

■プログラム:

Scene 1 プロローグ

(大阪ガスCEL/U-CoRoプロジェクト・ワーキング)

Scene 2 イマジン・トーク その1

プレゼンター 橋爪節也 (大阪大学総合学術博物館教授/大学院文学研究科教授兼任)

Scene 3 イマジン・トーク その2

プレゼンター兼コメンテーター

池田真優 (現代アーティスト) / 橋爪節也 (前掲)

オンライン・コメンテーター (オンライン&録画等で現場から)

上田假奈代 (詩人, NPO法人コロールム代表) / 小谷真功 (高津宮宮司) /

岸村 修 (ももに広場管理運営会会長) / 吉岡 徹 (NPO法人 出発のなかまの会, 松野農園) /

古見孝信 (北大江地区まちづくり実行委員会委員長) / 三木啓正 (都市空間企画研究所代表) /

宮野順子 (中大江学童保育保護者会会長, 武庫川女子大学准教授)

モデレーター

池永寛明 (大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問、
ナレッジキャピタル 大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜座長) (敬称略、順不同)





1902年1月2日、関西文学同好会新年会の集合写真

南木芳太郎と「上方」100号記念号



<注1>
1897 (明治30)年、大阪市は第一次市域拡張を実施。大阪市は接続する村を編入し、市域は約3.7倍に拡大。近代産業都市としての基盤が整えられていきました。

<注2>
1885年 明治18年淀川大洪水
1886年 コレラ大流行
1890年 新町大火
1903年 第五回内国勸業博覧会
1904年 淀川大改修工事完了
1909年 北の大火



1900年パリ万博の電気宮



金尾文淵堂が発行した大阪名所案内の「大阪名勝図会」第1巻



第五回内国勸業博覧会の美術館

Scene 1 プロローグ

エピソード年表でたどる、災禍と祝祭を生きた新星たちの点と線

構成：大阪ガス CEL / U-CoRo プロジェクト・ワーキング (CEL 弘本由香里、B-train 橋本護)

★時代を生きた若き群像

明治30年代の前半(1897～1902)は関西で文学熱が高まっていた時代。この世紀の変わり目は、「モダン大阪」到来の足音も聞こえると同時に、都市大阪が数多くの災厄に見舞われた時代でした。

一枚の写真があります。1902 (明治35)年1月2日、当時の関西文学同好会新年会が大阪で開かれ、多くの若者が集いました。

これは、37年後の1939 (昭和14)年に、大阪を代表する郷土研究家・南木芳太郎が発行していた郷土研究誌「上方」の第100号の巻頭に載せた写真です。

写真の前列左から2番目の人物が、南木芳太郎本人 (当時20歳)。その左が、名著をプロデュースする出版社となる金尾文淵堂の金尾種次郎。3列目の右端には、若き与謝野晶子の才能を世に出すことになる与謝野鉄幹の顔も。

さまざまな災禍と祝祭が交錯する、この時代、若き才能たちが集いました。その後の彼らの転変の点と線をたどってみましょう。

この時期は、今に続く近代都市・大阪の形成期でした (注1)。同時に、大阪のまちの近代化・都市化が急速に進み、その歪みも露わになります。公害、過密、貧困などの社会問題が顕在化していきました。人々は、洪水や大火、伝染病の流行などの大きな災禍にも晒されていきました (注2)。

さて、1902年の記念写真の当

時、心斎橋筋の南本町にあった書肆・金尾文淵堂の主人、金尾種次郎は22歳。それ以前の1899 (明治32)年に、薄田泣菫^{すすきだきゅうきん}の処女詩集『暮笛集』を出版し、ベストセラーに。口絵を描いたのは、新進画家の赤松麟作。種次郎とは、幼なじみの関係でした。

★転機は第五回内国博

一大転機のひとつは、1903 (明治36)年に大阪で開かれた第五回内国勸業博覧会でした。

同年、大阪での内国博開催を見越し、金尾文淵堂は新しい大阪名所案内の発行を企て、「大阪名勝図会」第1巻を発行します。

この第五回内国博のモデルとなったのが1900 (明治33)年のパリ万博ですが、その会場に青年実業家・荒木和一 (28歳)が立っていました。1896 (明治29)年12月、エジソン商会の映写機ヴァイタスコープを使い、日本初のスクリーン上映を大阪・難波で行った人物です。

彼は、大阪で開催が決まっていた第五回内国博の企画にも参画していて、パリ万博の会場を視察していたのです。パリ万博の電気宮、特にロイ・フラーの舞に感銘を受けて、大阪の第五回内国勸業博覧会では、娯楽施設「不思議館」を企画します。



1903年の第五回内国勸業博覧会会場の夜景

のちに流行作家・直木三十五となる、植村宗一少年 (当時12歳)が、安堂寺町の実家の店の売上をごまかして、この不思議館に米国人女性カーマンセラ嬢の「電気の舞」を見に行ったという逸話も残っています。

当時大阪・船場で暮らしていた、幼き稲垣足穂 (2歳)も、家族とこの第五回内国博を訪れています。夜間のイルミネーションに感嘆の声を上げ、幼心にモダン都市イメージを強く感得したそうです。

第五回内国博の会場には、美術館が設けられ、新進画家・赤松麟作は、白馬会展で賞をとった「夜汽車」を出品。多数の美術作品が展示され、大阪の画家たちは大いに刺激を受けました。

★金尾文淵堂、東京へ

1905 (明治38)年、金尾種次郎は、大阪から東京に拠点を移します。この後、精力的な出版活動を進め、凝った装丁の美本で知られる文芸出版社になります。特に与謝野晶子とは関係が深く、代表作の多くが金尾から出版されました。

1912 (大正元)年、内国博会場跡地の西半分に新世界が誕生し、遊戯施設が並ぶルナパークが開園します。荒木和一は、この跡地の開発会社顧問として、新世界

の開発・運営に参画しています。

同1912年、与謝野晶子は、金尾種次郎の依頼を受け、翌年にかけて『新訳源氏物語』全4巻を出版します。これは初めて行われた現代語訳でした (後の1939 (昭和14)年に『新新訳源氏物語』を金尾文淵堂から出版)。同年、金尾文淵堂は、『畿内見物 大阪之巻』を発行します。同書は、作家、画家、木版職人など多分野の才能を集め、編集・印刷技術の粋を尽くした金尾文淵堂の精緻な本づくりの代表作となりました。

翌1913 (大正2)年、足穂少年 (稲垣足穂、12歳)は、天王寺公園の全国発明品博覧会で、飛行機の実物展示を目にして心を奪われます。第五回内国博が開かれた大阪・上町台地では、その後も驚くほどたくさんの博覧会が開催され、都市と暮らしの近代化の揺り籠の役割を担っていました。公衆衛生も大きなテーマの一つで、1915 (大正4)年「大阪衛生博覧会」、1926 (大正15)年「衛生大博覧会」が天王寺公園で開催されています。

近代化が進むなか、光と影が交錯します (注3)。1918 (大正7)年8月、米価高騰に民衆が米屋を襲うなどした米騒動は瞬間に全国に拡大、大阪にも波及します。また、この春から翌1919年にかけて、スペイン風邪の流行が世界的に拡大し、大阪府では死者1万1千人、患者数は47万人に達しました。

同じ頃、1919年に金尾種次郎は、『畿内見物』全3巻をまとめ直したかたちで『畿内行脚』を発行。同書には、当時の文化を牽引する作家や研究者が参加。大阪の浄瑠璃研究家の木谷蓬吟も執筆しています。

★新星誕生の背景、近代化の光と影

1923 (大正12)年、稲垣足穂 (22

歳は、『一千一秒物語』を刊行、モダニズム文学の新星として一躍注目を集めます。しかし、同年9月1日、関東大震災が発生。首都圏は壊滅的な被害を受けます。このとき、関西に避難してくる著名な作家も数多くいました。金尾種次郎も、その拠点を再び東京から大阪に移すことになります。

同年、大阪のプラトン社発行の「女性」誌は、大震災の緊急特集号 (11月号)を出します。執筆者は、第一線で活躍していた男女40名以上に及び、平塚らいてう、与謝野晶子、高村光太郎、伊東忠太らの名も並び、京都に移った谷崎潤一郎も作品を寄せています。

関東大震災の後、東京から大阪に戻った直木三十五はプラトン社に入社。大正～昭和初の編集・デザイン史を彩った雑誌「苦楽」編集に携わり、同時に時代小説の執筆にも取り組み始めます。

1925 (大正14)年4月、大阪市の第二次市域拡張が行われました。周辺地域を編入し、人口・面積ともに当時、日本一の都市「大大阪」の時代となります。社会問題の解決に努め、文化的で安全・安心な都市づくりが標榜されました。

この「大大阪」誕生に合わせ、毎日新聞社主催の大大阪記念博覧会が天王寺公園と大阪城を会場に開催されます。

この博覧会に向け、赤松麟作は「大阪築城・落城」を壁画に描きます。会場の本館では、大パノラマのほか「二十七大阪」のテーマで都市・大阪の現状や未来像を示す展示が並びました。このうち、「文芸の大阪」展示を木谷蓬吟、「名物名所の大阪」を南木芳太郎が担当しています。

1926 (大正15)年、赤松麟作は、心斎橋筋2丁目の丹平ハウスに赤松洋画研究所を開き、後進の育成にも手腕を発揮します。門下

生には佐伯祐三の名もありました。

1929 (昭和4)年、木谷蓬吟は雑誌「郷土趣味 大阪人」を発刊。1931 (昭和6)年には、南木芳太郎が上方郷土研究会を発足し、機関誌「上方」を創刊します。

1934 (昭和9)年9月、室戸台風が襲来。被害の惨状を目の当たりにして南木芳太郎は「上方」第46号 (10月号)の編集内容を急遽変更し、大阪をはじめ近畿各地の被害を精確に伝える新聞記事や写真を採録。「上方大風水害号」として発行しました。

★戦後に続くその軌跡

1945 (昭和20)年、大阪大空襲で市街は廃墟になりました。

2年後の1947 (昭和22)年、赤松麟作 (69歳)は、金尾文淵堂から、戦災前の大阪を描いた版画集『大阪三十六景』を出版します。

1948 (昭和23)年、復興大博覧会が、天王寺区上本町8丁目付近の戦災地を舞台に開催されます。これは、焦土と化した大阪の復興のため、そのまま復興市街地をつくらうという画期的な構想でした。実際、この復興大博覧会の後、大阪府は多くの建造物を買収し「夕陽丘母子の街」計画を推進しました。

この復興博覧会は、大大阪記念博覧会と同じ、毎日新聞社の主催でした。その運営に携わった人物の一人は、南木淑郎氏。南木芳太郎のご子息でした。

その後も災禍と祝祭は、続きます (注4)。

そして、2020 (令和2)年の初頭から、新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行し、パンデミックとなりました。

このコロナ禍のもと、本来はオリンピックで沸くはずだった、「特別な夏」が、自粛生活のもと、静かに過ぎてゆきました。



<注3>
1918年 米騒動全国に波及
スペイン風邪流行
1923年 関東大震災
1925年 大阪市第2次市域拡張
大大阪記念博覧会
1934年 室戸台風
1941年 太平洋戦争始まる
1945年 大阪大空襲・終戦
1948年 復興大博覧会



1912年、金尾文淵堂は「畿内見物 大阪之巻」を発行



1925年4月に開催された、大大阪記念博覧会のポスター



1934年の室戸台風の被害状況などを記録した「上方」の風水害号

<注4>
1950年 ジェーン台風
1961年 第二室戸台風
1964年 東京オリンピック
1970年 日本万国博覧会
1990年 国際花と緑の博覧会
1995年 阪神・淡路大震災
2011年 東日本大震災



1948年に上町台地の夕陽丘で開催された復興大博覧会

参考文献・図版引用
大阪市立図書館デジタルアーカイブ
国立国会図書館デジタルコレクション
『大阪「映画」事始め』武部好伸、2016
『金尾文淵堂をめぐる人びと』石塚純一、2005
『大大阪記念博覧会誌』1925
『復興大博覧会誌』1948 ほか

Scene 2 イマジン・トーク その1

(P4～7掲載資料：橋爪節也氏提供)

「“エコール・ド・大阪”ともいうべき
時代精神とアーティストが果たした役割」

プレゼンター 橋爪節也

(大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科教授兼任)

はしづめ・せつや 大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員、大阪大学総合学術博物館館長などを経て現職。美術史研究にとどまらない観点から近世・近代大阪を探究している。編著書に『橋爪節也の大阪百景』『大大阪イメージ』『モダン心斎橋コレクション』など多数。

“エコール・ド・オオサカ”の
時代精神を探る KEY ワード

“エコール・ド・オオサカ”というのは、“エコール・ド・パリ”(パリ派)を模した言い方。“エコール・ド・パリ”には、画家のローランサンとかユトリロ、モディリアーニとかかいるのですが、それぞれがバラバラなわけです。いろんなところから来た人たちで、ひとつの流派というようなものもあまりない。それでパリ派という括りで呼んだ。近代の大阪について調べていると、現れてくる人物たちが、まさに大阪派っていう感じで、やはりそれぞれバラバラ。そこで、“エコール・ド・オオサカ”というような言葉をつくって、2007年に、大正イマジユリ学会というところで、“エコール・ド・オオサカ”の画家－北野恒富における郷里「金沢」と異国「大阪」と題して研究発表しました。

今日のこのフォーラムのテーマは難しい。突き詰めると、要するに文化的リテラシーの向上による大阪の発展を目指すものではないかと思います。この大阪のまちを文化的に理解していくというのは、私のような美術史とかをやっている人間から言うと、過去の歴史をちゃんと知ることだ

ろうと思います。今日は、「イマジン・トーク」ということなので、大阪について私が感じている、いくつかのKEYワードを挙げながら話をしていきます。

KEY
ワード 企業家のフィランソロフィー

まずKEYワードの1つは「企業家のフィランソロフィー」。フィランソロフィーは、寄付や奉仕事業などですが、これが大阪では多いわけです。

例えば、株式仲買人の岩本栄之助が寄付したのが中之島の中央公会堂。また、住友吉左衛門が大阪図書館(現・大阪府立中之島図書館)を寄付し、天王寺にある大阪市立美術館のためには土地を提供しています。

それから、現在、建設中の大阪中之島美術館の建設につながった原点と言えるのは、佐伯祐三の作品などを含んだ山本發次郎コレクションの寄贈でした。

今回は、コロナ禍のレガシーということで、スペイン風邪についてもお話しますが、今から100年ほど前の大正7(1918)年から世界的に流行したインフルエンザによるパンデミックがスペイン風邪で、画家のグスタフ・クリムトとかエゴン・シーレもこの感染病で死んでいます。

日本でこのスペイン風邪で死んだ有名な人には、建築家の辰野金吾がいます。皮肉なことですが、彼は、あの中央公会堂の設計の審査と実施設計に関係した人物。中央公会堂が大正7(1918)年11月に竣工し、翌年、辰野は国会議事堂のコンペの審査員をしたところ、3月25日に死んでしまった。

このスペイン風邪流行の後ですが、岸本吉右衛門という大阪最大の鉄鋼問屋の経営者が、大阪に市民病院を建設するお金を提供しています。現在の大阪市立大学附属病院ですが、このように大阪の企業家には、篤志家と言うべき人が結構存在していたことが分かるわけです。

KEY
ワード 大大阪(だいおおさか)

大阪市の誕生を振り返ってみると、明治元(1868)年に明治政府による大阪府設置がまずあり、明治8年頃は旧大坂三郷が大阪府の4大区になっていました。明治12年には東西南北の4区で、明治22年になって、大阪府下の4区が大阪市として独立します。ただこのときは「市制特例」というものにより、市長を置かず、大阪府知事の兼務。また当時の知事は勅撰で、政府の任命によるものでした。

明治30年、大阪市は周辺地域を取り込んで、第1次の市域拡張を実施します。これにより、面積は55.67平方キロ、人口は約75万人になり、さらに翌明治31年に市制特例が廃止され、市庁が府庁から独立し、市長選挙が行われるようになります。

そののち、大正14(1925)年4月1日、大阪市は第2次市域拡張を実施。これにより、面積、人口ともに東京市を抜き、大阪は日本第一の巨大都市になります。当時、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルリン、シカゴに次いで、大阪は世界6位の都市とも言われました。

この当時、大阪では、^{せき はじめ}關一市長を中心に都市計画が進められています。御堂筋や日本初の公営地下鉄の建設、築港整備など、都市基盤が築かれていきます。

こうして日本最大のマンモス都市となった大阪市を行政も市民もマスコミも「大大阪」と呼びました。明治以降、首都より巨大な都市が日本国内に出現したのは「大大阪」成立の大正14年から「大東京」成立の昭和7年までの大阪市だけでした。

実は、「大」をつけるのは「大大阪」だけの特殊な言葉ではなくて、この時期いろんなところで使われています。大神戸、大京都、大横浜とか。名古屋では駅前の「大名古屋ビルヂング」の文字を見て、大名の古屋ビルと勘違いした人もいる(笑)。ここで、ちゃんと理解するべきは、關一市長の都市運営によって、大阪が成功したということ。反対に、合併によって都市が巨大化したから大阪が発展したのではないわけです。

当時からも、手放しの評価だけでなく、大正14年4月1日の「大阪朝日新聞・大大阪記念号」の社説「大大阪の建設」にはこうあります。「都市建設の重點は、主と

して外形にあつて内容になく、量にあつて、質になかつた」と。しかしながらこの都市は、「接続町村の編入によって、一層都市的施設の稀薄にして不完全な部分を新たに市域に抱へ込んだ」と言います。それは要するに「一大原生林の開拓を引受けるにも等しい大責任を背負ひ込んだものである」。なんと「一大原生林」(笑)。こんな言われ方をした地域の住人はどう思ふのか(笑)。

大大阪という名のもとで農村部の人と都心部の船場辺りの人が同じ市民として共存できるのかというテーマが残る。つまり「大大阪の建設」の課題とは、「市民が一致団結して新しい都市を作ること」であり、それは「将来達成されるべき未完のプロジェクト」であるという考えだったわけです。

KEY
ワード イメージの大大阪

「大大阪」について、英語の表記では、“GREATER OSAKA”(グレーター大阪)と“GREAT OSAKA”(グレート大阪)の2つがある。GREATERは、英語では都市や国家に関する専門用語で、中心となる地域と周辺を含めたものを指す。都市、郊外も含めた都市圏などの意味です。Greater London、Greater New Yorkとも言います。つまり、海外の行政や都市計画を移入した「大大阪」はGREATER OSAKAが正式な表記で、新市制施行の大正14年の大大阪記念博覧会でも“GREATER OSAKA”と表記している。

一方、“GREAT OSAKA”は、一般に広まった別の意味あいの言葉でした。新しい理想の都市建設に市民は団結せよという訴えがあり、そのとき市民のプライドを支えたのが「大大阪」「GREAT OSAKA」という言葉でした。

「大大阪」になれば、すべてが良くなるなんてことは、誰も一言も言っていないわけです。

当時、大阪都市協会が発行していた雑誌「大大阪」でも、「けれども未だ『我等は大大阪市民なり』として世界に誇るだけの文化都市でもなければ経済都市でもない」と言い、その上で「大大阪主義による二百万市民の大同団結こそ嚆矢では東亜の大大阪たらしめ世界の大大阪たらしめねば止まぬのである」と述べています。ここでも、市民の団結による「大大阪」建設を訴えています。

KEY
ワード シンボル誕生

そこで、市民が団結し自らのまち大阪を良くするための、シンボルの創生が求められてきます。大阪城天守閣の再建の提唱は昭和3(1928)年で、昭和6年市民の寄付金で竣工します。大阪帝国大学も昭和6年にできています。

大正10年の大阪市歌の制定も市民意識を高揚させるものでした。歌詞を一般公募し、森鷗外と幸田露伴らが審査。堀沢周安の歌詞が選ばれました。

また、戦前の大阪市内の学校の校歌で、歌詞に「大大阪」が入っているものもたくさんあります。船場中学校は「大大阪市の中枢に」、旧制北野中学校「隆々と榮ゆ大大阪 東亜の文化燦たる」と、愛日小学校「大大阪のまんなかに」など。

ちなみに長野県歌「信濃の国」は、長野県人ならみんな歌えるし、歌いたがる(笑)。現在、大阪府・広島県・大分県だ



岩本栄之助の寄付により建てられた中央公会堂



住友家の寄付により建てられた中之島の図書館、内部にはドームの八聖殿



スペイン風邪で死亡したクリムト、1世紀後の2019年に日本で展覧会開催



絵はがきに描かれた大大阪時代の大阪市役所



第6代大阪市長、池上四郎の像は天王寺公園に、その後継者、關一市長の像は中之島に立つ



GREATER OSAKA (大大阪記念博覧会ポスター、1925) と GREAT OSAKA (大阪市パノラマ地図、1924) のように、英文表記が異なる





大阪市の市立託児所、市立産院、市営質舗（『大阪市大観』1925）

けが都道府県歌がない。その分、郷土意識が乏しいのかもしれない（笑）。

KEYワード 關市長の名言

關市長の言葉に、「上を向いて煙突の数を数へると同時に下を見て、下層労働者の生活状態を観察せねばならない」というのがあります。

当時、大阪市の福祉的な政策については、割と手厚いものだったと言われています。例えば、市立衛生研究所、工業研究所、市営住宅、市立託児所、市立職業紹介所、それから市営質舗も運営した。公営の質屋があったわけです。こういうことをやったのが大阪市。

ここで災害の話。昭和9（1934）年、關市長は室戸台風の被害を復旧するために東京と大阪を行き来する間に病気になって亡くなった。61歳です。とても若い。その死を悼んで天王寺公園で市葬が催され、大勢の市民が集まりました。

KEYワード 大大阪は文化都市を目指す

昭和5（1930）年、大阪都市協会の雑誌「大大阪」にこうあります。「徒らに人口のみの多いことが決して現代都市の誇りにはならない。大都市には大都市であり得るだけの都市施設が整はなければならぬ」、また「文化的にも経済的にもその點に缺けるところがあれば、それは都市として二流三流のものでなければならぬ」。



大阪都市協会発行の「大大阪」

こういう観点から、公会堂、美術館・博物館のほかにホテルが大阪につくられていきます。その一つが新大阪ホテル、現在のリーガロイヤルの前身です。それか

ら、大阪市の展覧会施設としての市立美術館の建設がなされます。そして、美術家育成の教育機関として工芸学校の開校。美術家の組織化も行われ、大阪市美術家協会が結成されます。これらは大正12（1923）年頃のこと。

ちなみに、2008年のデータですが、人口10万人における美術館数では、大阪は全国で、なんと46番目です。大阪には16の美術館がありますが、これは山形県とかと同数。ちなみに京都は39館ある。

KEYワード 奮起する画家たち

大大阪の時代から、大阪美術学校の校長の矢野橋村は、「大大阪の美術が知らず知らずの裡に荒んで行く事を手を空しくみる事が出来やうか」と憤っているわけです。さらに、商工業都市として発展する大阪ではあるが、「此の荒みきった大阪の土に呱呱の声を挙げた我大阪美術学校」では、「諸君と共に其一步一步は開展されて行く」ので「そこに精進努力せねばならぬ即ち勉強そのものに万事が含まれ居るものである」と、学生たちの奮起を促しています。

天王寺の美術館ができたときに、伊達俊光が「大阪市の新美術館について」（大阪毎日新聞『大大阪と文化』）に、「美術館が発揚する芸術的雰囲気がこの物質の塵都を幾許なりとも浄化し、市民の美術に対する愛慕心、鑑賞力を高め、延いて斯道の保護者をも輩出せしめ得る動機となり得ることに想到し」と書いています。大阪をなんと「物質の塵都」と評して（笑）、その大阪につくられる美術館は、「単に有閑階級のためのものでなくて、一般民衆自身のものと思はれるまでに社会的に進出して断えず澁刺、清新なる生命の源泉たらんことを今から待望し」といって続いています。



1934年、天王寺公園で行われた關一市長の市葬（『故大阪市長関一市葬誌』1936）

KEYワード 二つのベクトル 大大阪 VS 浪花

大大阪の時代、モダニズム都市の興隆に対して、反対に滅びゆく伝統に対するまなざしをも生みました。この時期に大阪では集中して郷土研究の雑誌が出されます。木村旦水の「難波津」（大正13年創刊）。さらに、木谷蓬吟の『郷土趣味大阪人』（昭和4年創刊）。決定版は、南木芳太郎の郷土研究「上方」（昭和6年創刊）でした。

『難波津』創刊号には、新しい大大阪の建設は進んでいくのに反して、「我大阪の遺跡口碑など所謂浪華の面影は漸次に亡びゆきます。その懐かしい難波情調を、せめては今の中に書きとめて後世に残し置きたい」と記されています。近代化が進むにつれて、古き大阪の良きものがなくなっていく。それは実に残念だと。

南木芳太郎も「上方」創刊号でこう語る。「亡びゆく名所史蹟、廃れゆく風俗行事、敗残せる上方芸術、その一步步々薄れ行く影を眺めて、私は常に愛借の情に堪へません」と、さらに「滅びゆくものは時の勢として如何とも致方ないが、せめて保存に努めたい、そして記録に留めて置きたい」、それが南木の念願でした。伝統文化に関心を寄せる人たちには、近代化していく大阪の姿には、何か大きな不安を抱かせるものがあつたのでしょうか。

昭和12（1937）年に、大阪市が映画「大大阪観光」を制作しますが、ここでも大



1937年に大阪市は映画「大大阪観光」を制作

阪のまちに対する同様の見方があります。ナレーションは、「ここに産業の都モダン大阪の内に流れる古き難波の姿をしのび、歴史の都として由緒ある過去の姿を見、一面また観光都市としての大阪を鑑賞することは、旅する人にとって、またひとつの憧れでありましょう」と語る。

つまり、大阪という都市の特色は、「モダンな産業の近代都市」、「難波宮、大坂城など歴史ある都市」、そして「観光都市」というもの。結局、2つのベクトルが葛藤する状態が大阪なのだということを明確に意識をしているわけです。

KEYワード 赤と黒との印象

北野恒富という大阪の画家がいます。画壇の悪魔派と呼ばれ、生活のなかの暗黒面を見すえる、耽美主義的な表現が特徴です。「朝露（道行）」は「心中天網島」を描いたもので、大正2（1913）年の作。ウィーン分離派風の趣も入った、ものすごく生々しい表現。その恒富の作品には、赤と黒との印象のものがあります。

大正4年の作品で、「鏡の前」（第2回再興院展）と「暖か」（第9回文展）は本来一対のもので、両者は帯と着物の色の赤と黒が、相互に対になるように配されて、強い印象を与えるものです。

また、小出檐重「上方近代雑景」（『めでたき風景』創元社、昭和5年）に、こういう表現があります。「私は子供の如く、百貨店の屋上からの展望を好む。例えば大丸の屋上からの眺めは、あまりいいものではないが、さて大阪は驚くべく黒く低い屋根の海である。」、ここでも黒い屋根の海。この黒の印象は、大阪的なもののひとつだと言えるでしょう。

KEYワード 大大阪君の似顔絵

大大阪君の似顔の図というのがあります。岡本一平が描いた大阪のイメージ。岡本一平は、岡本太郎の父親です。

完成したイラストの鼻は通天閣で、帽子は淀川区あたりの大根畑なんですけど、その風貌は、資本家風ではなくて



「贅六パック」表紙 1907

フランスの労働者風で、庶民的。大阪に対しては、岡本一平が抱いたこういうイメージがある一方で、東京パック定期増刊号「贅六パック」の表紙に、女性に言い寄る下品な若者の顔が描かれているように、何でもお金で言うことをきかせるみたいな（笑）、こういう東京から見た大阪イメージというのも昔からあったわけです。

KEYワード 街中のアート

近代的都市には、やはり、それにふさわしい都市美の創造も求められました。例えば、難波橋のライオン像は、パリのアレクサンドル3世橋を模して飾られたともされています。

また、中央公会堂の正面ドームの上には、豊穰の神ミネルヴァと商業神メルクリウスの像があります。大阪人にとって、このメルクリウスは非常に重要なもので、大正14（1925）年の「大大阪記念博覧会」のポスターにも、メルクリウスのような若者が描かれています。戦後では、大阪万博の際、イタリア館に「メルクリウス」像がきて、現在は大阪のマーチャンダイズマートの前にその複製があります。

KEYワード がめつい ヒョウ柄

次は、大阪人は「がめつい」か？です（笑）。そもそも、「がめつい」は大阪の言葉かというのがあります。そのきっかけは、芝居の「がめつい奴」。これは、劇作家の菊田一夫が、1950年代半ばの釜ヶ崎で暮らす人々を描いた長編戯曲で、日本劇団史に残るロングラン記録を打ち立てた。この記録は1983年、劇団四季『キャッツ』に破られるまで続きました。1960年に



岡本一平が描いた大阪のイメージ・似顔絵（大阪朝日新聞 1925）

映画化もされた。その影響が強烈で、大阪イコール「がめつい」になった。

小野十三郎は、『大阪一昨日・今日・明日』（角川新書、1967）で、こういうのは、元々の大阪言葉にはないとし、続けて、大阪の庶民には、「だれかの口車にのっているとは気がつかず、大阪ふうや大阪的であることを、みずからの必要以上に自慢したがる傾向がある」と嘆いた。

実際、大阪ではアニマル柄が多いと言われるが、大阪と東京どっちが多いかの博報堂調査では、2005、2009年の2度とも東京の方が多かった（笑）。にもかかわらず、大阪が多いとみながそう思っている。

KEYワード 三都 素数の都市

大阪は、東京や京都とは異なる個性をもつ都市。日本で、ここしかない大阪は、言ってみると「素数」のような都市です。

現代も他の地方都市が模倣して「小京都」「小江戸」と呼ばれることがあるし、関連都市が集まって「全国京都会議」「小江戸サミット」なども開催されている。金沢や高山も、昔は「小京都」を自認していましたが、現在は、両方ともが金沢は金沢、高山は高山として独自のまちを目指しています。

大阪も本来そうした個性の都市だったはず。経済的蓄積以外にも大阪にしかない歴史的蓄積、つまり文化資源が豊かにあるのが、大阪という都市の特徴。その意味でも大阪は素数のまちだと言えるわけです。

KEYワード こんども負け戦だったな

「こんども負け戦だったな」、これは映画「七人の侍」のラストの名文句。結局、勝ったのは、侍ではなくて農民たちだった、ということです。

同じように、大阪の文化人たちはいろいろ頑張って、さまざまな文句を、行政に対してだったり、大阪の一般市民に向けても言ったりしてきたのですが、どうも、結局は必ず負けているようにも思われます（笑）。いろいろ頑張っても、「こんどもまた・・・」と言って終わる。そうした深い感情が大阪人にはあるんです。

Scene 3 イマジン・トーク その2 会場とオンサイト(現場)を結んで

「災禍と祝祭を生きた新星たちとの出会いから、
ポストコロナの真の“レガシー”とは何なのかに迫る」

プレゼンター兼コメンテーター:

池田真優 (現代アーティスト、橋爪節也 (前掲)

オンサイト・コメンテーター (録画もしくはオンライン等で現場から):

上田假奈代 (詩人、NPO 法人ココルーム代表)、
小谷真功 (高津宮宮司)、岸村 修 (ももに広場管理運営会会長)、
吉岡 徹 (NPO 法人 出発のなかまの会、松野農園)、
吉見孝信 (北大江地区まちづくり実行委員会委員長)、
三木啓正 (都市空間企画研究所代表)、宮野順子 (中大江学
童保育保護者会会長、武庫川女子大学准教授) ほか

モデレーター: 池永寛明 (大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問、ナレッジキャピタル大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜座長)

コロナ禍の本質を考える

池永 寛明 (大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問、ナレッジキャピタル大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜座長)

いけなが・ひろあき 過去と現在、内と外をつなぎ、都市・地域の本質 (コード) をさぐりだし、方法論 (モード) を導きだし、これからの日本のあり方を考え実践していくルネッセ (再起動) を展開。共著に『上方生活文化堂』ほか。

●コロナ禍で何が変わったのか

コロナ禍の「禍」(わざわい) とは何か。「災」は元に戻せる。壊れたものは直せるし、なくなったものはつくり直せる。一方、「禍」は元に戻らない。コロナが収束しても、元には戻らない。コロナ禍期は大断層 (リセット) であり、未来への岐路だ。

コロナ禍の本質を考えると、「時代は先に進んだ」と言える。2030 年に、こうなるだろうと思っていたことを10年前倒して、

コロナ禍の本質は、「時間」と「場」の変革

- 輸送技術の進歩はヒト・モノの物理的移動革命 → 「時間」の概念を変える
- IT・デジタル技術の進歩は時・空間革命 → 「場と時間」の構造を変える

現在、「社会実験」しているのだと言える。

その本質は、「時間」と「場」の変革だ。150年前まで、東海道五十三次は歩いてきた。輸送技術の進歩は移動時間を短縮化した。伊勢に行ってお土産に買った赤福が、駅で買えるようになり、家でいつでも注文でき、届くようになった。

これまで遅々として進まなかったモノ・コト・サービスを体験して、多くの人

が「意外に便利」「とってもいいじゃないか」と感じて受け入れた。

●変わる、「社会的価値観」

その人にとっての場が変わると、その人の時間が変わる。人と人との関係性が変わる。ワークとライフが溶け合っていく。それだけではなく、これからは、「どう生きるか」が重要になる。コロナ禍のなか、「社会的価値観」が変わろうとしている。人々は生き方の本質を考えだしている。

ステイホームで、人々は家にずっと家族という「濃厚な時間」を体験した。親と子とは、家族とは、働くとは、会社とは、学ぶとは、地域とは何か、根本的に問い直されることになった。

家族が一緒に、幸せで、安全で、健康的で、便利で、快適で、自らが成長するという実感が得られ、ずっとそこに住んでいたいという「社会的価値観」になりつつある。

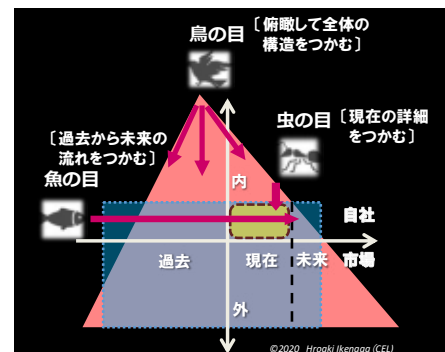
これらの時間が、人生のなかで、最も記憶に残る日々になる可能性もあるだろう。変化しはじめた「社会的価値観」は強固になり、どんどん洗練されていく。多くは不可逆で、コロナ禍後は、コロナ禍前には戻らない。

●「鳥の目」と「魚の目」で
コロナ禍後を見ていきたい

コロナ禍は「大断層」。大阪はなんども「大断層」を経験している。そのたびに大阪は再起動してきた。大阪は変革しつつけてきた都市。だからこそ、過去から歴史から学んでみる必要がある。

今日は大阪で頑張っている人と、コロナ禍のことを考えたい。虫の目・鳥の目という見方がある。私たちは、いつからか「虫の目」で現在だけしか見なくなっており、反対に「鳥の目」で市場全体を見たり、「魚の目」で過去から現在の流れを見たりしなくなったように思える。

今日はぜひ「鳥の目」と「魚の目」で、コロナ禍後を見ていきたい。「虫の目・魚の目・鳥の目」で、コロナ禍の「真」のレガシーとは何なのかに迫ります。



イマジン・トーク 「イマジン」を発揮し、コロナ禍の「真」のレガシーを考える

池永 「想像」と「創造」は同じ「そうぞう」だけれど。想像 (イマジン) は、使ってくれる人のことをイメージしたものをつくり、「これ、ええなあ」というお客さまの共感を願う。一方、創造 (クリエイト) は、自分がいいと考える価値観でものをつくり、お客さまに「解釈」を求めるもの。私には、日本人の感性のベースである「想像力」が劣化しつつあるように思えます。本日はこの「イマジン」を発揮して考えていきたい。

ではイマジン・トークをはじめましょう。橋爪先生にお尋ねします。ここ大阪で、時代を切りひらいた「想像力」というのは、どのような環境で育まれたのでしょうか?

橋爪 一言で言うのは非常に難しい。ただ、大阪というのは、文化というか芸術、美術の世界では、私には汽水域というよ

うな、海と川の水が混ざるところで、何かそこに得体の知れないものが住んでいるというようなイメージがあります。魚によっては窒息するんじゃないかと思うけど、そこに独自性も生まれてきたのではないかな。

昔の大阪の画家が書いた文章を見ると、みながぼやいている (笑)。大阪は美術家を殺しこそすれ、育てるところではないと。矢野橋村などがそうで、私はいっそ大阪の悪口を集めようかと思っています (笑)。

基本的には、そのラインで、「こんども負け戦だったか」というところにいつしまうわけです (笑)。

明治末、第五回内国勲業博覧会が大きな時代の転機になったというのは、安西冬衛が詩に書いていますが、雰囲気はころっと変わったそうです。次の大正時代、

第一次世界大戦が勃発しているのにヨーロッパに行けないというのもあって、パリに留学しようとしても無理ということでした。それが大正12年ぐらいから、大大阪の時代になってようやく留学に行けるようになる。そういう状況のなか、大阪は恵まれていなかったのが、逆に良かったか悪かったのか、大阪の個性らしいものが生まれて、京都にもない東京にもないものになったという言い方ができるんじゃないかな。

池永 様々な歴史的背景があつて、大阪の独自性が生まれたということですね。

それでは続いて、若者代表として、現代アーティストの池田さんにうかがいます。池田さんは名古屋出身で、現在は東京におられるんですけど、大阪を見てどう感じるかを聞いてみたいと思います。

現代の大阪はどう見えるのか?

現代アーティスト 池田 真優

いけだ・まゆ 経営、技術、シンギュラリティ、日本文化などと融合したFBグループを次々主宰。日経新聞 COMEMO のアート部門最年少キーオピニオンリーダーに抜擢され、アートコラムを1年半にわたり発信。1年間で note のフォロワー数は約1万人となる。



70年万博の太陽の塔内の構造との類似を感じさせました。

●ダイナミックな空間と色彩

大阪駅の時空の広場では、縦に大胆に空間を使う設計力が素晴らしいと思いました。感性の高い街、芸術の都大阪だからこそ、空間をダイナミックに使った設計が際立っていて、寛容で開放的なまちである大阪ならではの感覚を感じました。

デパートでも、高い天井を活かして、人が団欒とできるスペース、人が交流

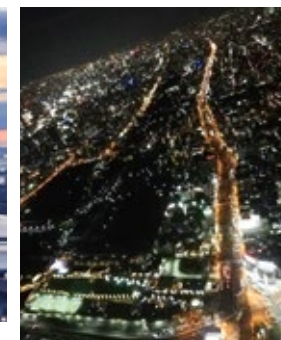
できる「つなぐ」場がつけられていました。空間を縦に使う空間設計の仕方がとても上手いと思いました。

大阪駅周辺では、ここでも太陽の塔を意識したかのような柱の丸みあるデザインに魅力を感じました。あわせて、大阪駅では上品な黒の美しさを感じられました。

あべのハルカスからみた夜景は、赤い大動脈のような線が見えて生き物のようで、エネルギーを感じました。大阪のまちを築き上げた先人たちの想像力、「俯瞰力」の高さを感じました。

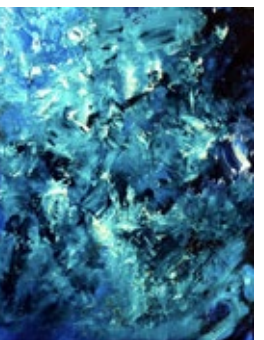


梅田スカイビルからの夕景



あべのハルカスから見た夜景

池田真優さんのアート作品



池永 橋爪先生どうでしょう。

橋爪 今の話で、大阪の建築における先例を求めるなら、垂直構造の高さでは、多分ヴォーリズ設計の大丸心斎橋店でしょう。立派な吹き抜けがあった。

「赤と黒」では、花街にしても町家の壁は本来は白でしょうが、近代になると北浜の小西家住宅の黒い壁だったり、空堀商店街あたりも黒いイメージがある。そこに付け加えると、大阪の道は、割と骨太。幅広い道でそこに黒ときている。同じ碁盤目状でも京都はちょっと華奢な感じがする。つまり、大阪は骨格がしっかりしたまちであったということです。結局、どんな大阪かはよく分からなくなってくるんですけど (笑)。幅広いバリエーションが見えていたと思います。

池永 続いて、上町台地のいろいろなところで懸命に頑張っておられる方々からお話をうかがいます。映像およびオンラインからを含めて、現場からの報告です。最初は釜ヶ崎から、上田假奈代さんのコメントです。



ココルームのゲストハウスもアートに包まれている。森村泰昌さんの作品の部屋。廊下の壁の絵柄も釜ヶ崎のおっちゃんを描いたもの。



ココルーム1階の「本間」は喫茶室。マスターをするのは常連さんたちで、訪れた方との会話を通して、その人に合った本を進呈することもある。



表現することの手前で大切な「ひとりの民主主義」

上田假奈代 (詩人、NPO 法人ココルーム代表)

「ココルーム」という場づくりから

大阪の中心部のちょっと下にある西成区の通称釜ヶ崎、このまちには1960年代から日本の高度経済成長を支えるために、たくさんの労働者が集められました。道路や建物をつくってきたわけですが、ところが90年代のバブル崩壊で仕事がすっかり減ってしまい、労働者は高齢化し路上に押し出される状況になります。

私は、2003年に浪速区にあるフェスティバルゲートという建物の1室を拠点に「ココルーム」をはじめます。そこで喫茶店のフリをして、誰でもが表現に参加したり触れたいことができるような場所をつくろうとしていました。

そのときに気づいたことですが、建物を出ると両手に荷物を持ってずっと歩き続ける人たちが本当に大勢いました。

医療や福祉や就労支援の人たち、また運動団体の人たちもココルームの喫茶店を使ってくれたので、コーヒーを出しながら、このまちのことをいろいろ教えてもらったんですね。そして、日本の高度成長を一番下で支えてきた労働者の人たちが、本当のところはどんなふうに思っていたのかを私は直接聞いてみたいと思ったんです。

5年後、その場所を出ることになったときに、釜ヶ崎に拠点を移そうと思い、動物園前の商店街の小さな元スナックを借りて、再び「ココルーム」を開きました。

釜ヶ崎芸術大学と井戸掘り講座

その場で「釜ヶ崎芸術大学」のプロジェクトを2012年に始めます。炊き出しの会場だったり施設の談話室などをお借りして、天文学とか俳句とか詩とか絵画、また数学だったりガムランだったり、本当にいろんな講座を開きます。今は年間100ぐらいを続けています。



2019年に釜ヶ崎のおじさんに十八番である土木を先生として披露してもらい、若者たちや旅人や子どもや普段は工事現場に入れないような人たちが、彼らから学ぶというこ



とで井戸掘りという講座を行いました。半年かけて、深さ4.5mの井戸を掘りました。そこで子どもたちが、おじさんのことを先生と呼んで尊敬の眼差しで見つめている姿は、本当に「釜ヶ崎芸術大学をやりたいかっと思いが形になったと感じました。

私たちの間に信頼とか尊敬とかという気持ちがあってこそ、人はより深く語ってくれるんだと分かりました。そういう時間をつくること、今は大事だと思っています。

コロナ禍の「ひとりの民主主義」

実はココルームでは、7月に宿泊者からコロナ陽性者が出たんです。そのとき、対応についてはみんなとよく話し合いました。

私が考える芸術というのは、何かを表現することの手前に、みんなが安心して自分の気持ちを語り合えるところが大事だということです。なので、しんどいねということをやちゃんと語り合った上で、でもこの場所で、接触している人もいるかもしれないから、やっぱりこのことを公表しようという話になり、私たちがこの事態をどのように考えるのかをまず文章にしようということ、私が書いて公表しました。

コロナ禍の今、大事だと思うことについて、どういう言葉が良いのかと考えてみると、私は「ひとりの民主主義」という言葉が頭に浮かびます。

まず、人のことを思うこと。芸術が果たすところは、今の時代はそこなんじゃないかなと思っています。一方で、みんなが同調して同じような意見を言うことが多くなっています。ひとりの人が、でも何かちょっと違うんじゃないとか、もうちょっと立ち止まって考えようとか、もう少し話し合おうよっていうような、ちょっと異なることを声にしてみるという、そうした「ひとりの民主主義」というものが、実はとても重要な局面に入ってきたんじゃないかなと思うんです。

Video message

1 Video message

池永 上田さんのメッセージでした。今日は、釜ヶ崎芸術大学で俳句の授業を担当されています。橋爪先生、どうでしょう。

橋爪 確かに「ひとりの民主主義」やと思いますね。こういう感覚は今ではよくわかる。

今度のコロナ禍というのは、実はまだちゃんと見えていない。ようやく、見えてきつつあるというような状態だと思う。

阪大の博物館の展覧会も、今年4月の予定が実際に開催したのは6月後半でした。そのテーマが70年万博とアートで、コロナがなかったら、かなりの入館者が見込めただろうと (笑)。でもそういう思いとは、まったく逆の方向で、最近、気づいていることもあるんです。

今やっている展覧会は1年以上前の企画。つまり以前の感覚のテーマのものを美術館はやっている。いかにもそれだったら人がくるやろうというノリのタイトルや企画も多い。そういう価値観とかもすでに変わってしまっていると思うんですね。

池永 確かにそうですね。

池田さんは、アーティストとしてどう感じましたか？

池田 アートを通して人と人をつないで、社会に居場所をつくっていくことは本当に大切なことだと思います。私もそういった活動をしていきたいと思いました。

高津宮の井戸掘り (2020年2月)、参拝の方も加わって老若男女が息を合わせて綱を引く。



井戸掘りを通して、見えないつながりを実感

小谷真功 (高津宮宮司)

かつてあった井戸を甦らせる

私は神主として、神と人の中取りもち、また人と人の中取りもちというスタンスを忘れずにやっていきたいと思っています。

掘削中のこの井戸も、当宮境内に、様々な人たちが集うなかで計画されました。

江戸時代には、本殿の前方には、高台にありながらも井戸があったというのが昔の絵図から判明していましたが、この井戸は、数年前から境内で「あきんどまつり」をされている方々の協力で掘り始めたものです。

高津宮に何か寄与をしたいという申し出があり、昔は井戸があったという話をしたところ、それを現代に甦らせようということになり、プロジェクトが発足しました。

作業を通じて広がる交流の輪

大きな穴を掘るのではなく、鉄管をどんどん掘り進めていって水脈に当て、そこからポンプで汲み上げるという計画で、足場をつくり、滑車をつけて、その鉄管を持ち上げて落とし、その重みで掘っていくということでした。どうせなら、より多くの方々に手伝っていただいでということで、人力で掘れる上総掘りを応用しました。これは、いわば「高津掘り」ということです。

昨年夏に掘り始め、2020年4月には、もう少しで水が出るんじゃないかというところまでできました。コロナの影響で、現在休止中ですが、必ず再開するつもりです。

水が出たら、そこにはきっといろんな人



高津宮の「とこしえ秋祭り」の「とこしえの船」。

池永 次は、高津宮の小谷さんのメッセージ映像です。撮影中に蚊がいっぱいいて、刺されながらのコメントです (笑)。

2 Video message

池永 撮影中に近所の子どもたちが寄ってきて、宮司さんに挨拶しているのを見た

Video message



が集うことでしょう。昔から井戸端会議と言うように、井戸がある所に人が集って輪が広がっていきました。

当宮には、神事のための神聖なお湯を炊き上げるかまどが外にあり、この井戸から汲み上げた水をそこで使いたいと思っています。また、もしもの災害時に、ここが避難されてくる方の受け入れ場所となるのにも役立つのではないかと考えています。

目には見えないご縁をつないで

毎年、10月には神社の新しい秋祭り「とこしえ秋祭り」を開催しています。境内の参道に全長8mほどの「とこしえの船」をつくり、その船にお参りされた方々の心を乗せ、神の御霊とともに、とこしえなる方向へ進んでいくというものです。

皆さんと心をひとつにできるのが祭りの本義。やはり人の心が揃わないと祭りではありません。その人の心によって神の威が増すという相乗効果です。

先だっの夏祭りも賑やかなことはできませんでしたが、お参りされたみなさんが神前で祈っておられる姿を見て、やはり神社というのは人の心を癒して、何かエネルギーを与えてくれるのではないかと感じました。神と人の縁、人と人の縁、目に見えませんが、確かにある。そういうご縁を紡いでいくのが私の仕事だと思いますし、これからの神社界の役割じゃないかと思っています。見えない面にも心を砕いて精進して行きたいと思っています。

時に、この神社は地域の中に生きているのだなと感心しました。ひとつの交流の場でもあるのだと思いますね。

橋爪 高津宮は、昔から歌舞伎の「夏祭浪花鑑」とか、落語の「高津の富」とか、芸能にいろいろと関係深いところがあります。井戸でいうと、高津というのは湯豆腐で有名だった。本当に清水がありましたから。



人が人を呼んでくる関係の場づくりを大切に

吉岡 徹 (NPO 法人 出発のなかまの会、松野農園)

農園の野菜を通じた交流も

私たちは主に知的障害者を支援している事業者です。今日は、私が運営担当をしている生野区の松野農園からオンラインでつないでいます。

ここでの活動は、障害のあるなしに関係なく、子どもからお年寄りまでの出会いの場につながっていけばということで、今年で6年ほどになります。

ここの建物で、さまざまなイベントをやっているんです。地域の内外から、いろんな人に来ていただけるような、そういう場所になればいいなと思って活動しています。

裏には、こじんまりした畑もありますので。そこで野菜を育て、収穫した野菜を使って、一緒に料理をつくって一緒に食べるランチ会を毎週火曜日に続けていました。けれども、コロナ禍で、現在はやむなく休止しています。

そこで今は、畑でできた野菜は、付近の児童施設の子どもたちに収穫しに来てもらったり、地域で子ども食堂をされているところがあるので、そちらにお分けしたりしています。

多文化交流の実践の場を提供

この建物では、地域の外国人の人が主体となってイベントを開催したりもしています。多文化のそれぞれの歴史や文化風習などを紹介して交流し合うという、「IKUNO サラダボウル・プロジェクト」です。

これは、数年前にひとりの留学生がここに来て、この場所を使って、地域



の外国人の人たちと野菜を育てて、交流したいという希望があって始まったもので、インドネシア、ベトナム、韓国、台湾などの人と日本の人が集まって、料理をして一緒に食べる活動です。野菜は国によって用い方が違うので、その調理の仕方を紹介しながら楽しく交流していました。

まず顔が見える関係づくりから

生野区は大阪市内で3番目に空き地、空き家が多い地域です。そこで、「生野区の空地・空家を利用した食と農のプロジェクトをすすめる会」を立ち上げて、行政の人や福祉関係者、不動産関係の人からダンサーの方まで、多様な方々に定期的に集まっていたいて、いろいろな話をしています。それによって何かの課題が解決できたかというところ、今のはそれほどのことはないのですが、活動を通して顔が見える関係をつくり、その活動によって人が人を呼んで来てくれるという関係性が生まれてきました。

多くの活動が、今は休止している状態ですが、再開を望む声もたくさんあがっていますので、方向性は間違っていないという確信をもとに、今は希望を新たに、今後の方策を探っているところです。

池永 5カ国以上の、それぞれ違う文化の方と日本の方とが交流されている？

吉岡 「IKUNO サラダボウル・プロジェクト」を発足させた時は留学生がメインでやっていました。生野区はもともと在日の方が多い地域ですが、今は在日コリアンの方と新しく入ってきた方々とが混じり合ってきています。そこに、障害者の方も含めて、多様な人が交流できる場をつくっていききたい。障害者というだけの視点で見られるのではなく、同じ一人の人間というか、市民としていろんな人たちとともに活動するような、そういう地域づくりをしていきたいです。

Zoom online

池永 続きまして、生野区の「ももに広場」で撮影した、岸村さんのコメント映像です。

4 Video message

池永 岸村さんは、本日、会場にいらしています。もう一言お話いただけたらと思います。



岸村 私は、コロナ禍での3密を避けるようにとの要請は、素直に受け止めています。

しゃべり好きの私が、会話の自粛を言うのか(笑) という話ですが、今は一旦おしゃべりやめて、人と人が離れてもええんやないかと思ひます。

そして改めて、自分の身の回りの事々々を感じ直す見直すいい機会やないか。そこから一人ひとりが新たな生き方や価値観をみつけどす、それが“ウィズ&アフターコロナ”やと思っています。

池永 ありがとうございます。結論をもういただきましたが、まだ続きますので(笑)。

池永 次に、上町台地の北端、北大江公園から、吉見さんと三木さんのコメント動画です。

5 Video message

池永 今ちょうど北大江地区では、「たそがれコンサート」を開催されているそうなので、現地から一言お話いただけたらと思います。



北大江たそがれコンサートの会場からの中継。



“助ける喜び”“助けられる喜び”が出会うまち

岸村 修 (ももに広場管理運営会会長)

地域の心と力をつなぐ「ももに広場」

この「ももに広場」は、ふだんは地域コミュニティ交流の場、広場両側の南北の道をつなぐ生活道路として使われ、災害時は地域の避難場所と通路になります。また通路全体が葡萄棚になっており、通路奥には木々花々に囲まれた四角い形状の土のグラウンドがあり、様々なイベントの会場となります。

そのきっかけは、戦後まもなく、ご夫婦で小さな部品工場を始められ今は立派な会社を経営されている会長さんの「創業の地をかつて助けられた地域住民に提供したい」とのお申し出。それを自治会長として受けた私は大いに感激し、住宅密集地の悲願でもあった地域の防災、そして住民交流の拠点として結実したいと決意。「広場プロジェクト」がスタートしました。

しかし、突然降って湧いた、言わば「小さな公共づくり」は、当初混乱迷走し、地域社会が抱える様々な課題も浮上。その課題克服へ、大阪市行政の資金や技術など公的サポートに加え、何よりも住民同士が対話と勉強を重ね、理解と信頼を深め、広場のビジョンを創出共有できたことは、まさに住民のための住民による「新しい公共づくり」とも言えるものでした。

“ふつうに暮らす幸せ”を見つめあう

春は「ももに広場」の心を確認する「誕生祭」、その心をつ



「ももに広場」には、子どもからお年寄りまで地域の多世代が集まってくる。

なぐため毎月開く「青空カフェ」では、大きなテーブル、ポットの花、温かいコーヒーが揃い、くつろいだ会話が始めると、気分は自然と和みだし、次々新しい夢が生まれます。私たちは青空カフェを「外の常会」とも呼び、日々の生活に根ざした楽しさ辛さを喜び悲しみを、生きた情報として捉えます。私たちは“行事”ではなく“風景”を創りたい。“成果”を求める行事ではなく、いつもそこにある“風景”です。つまり身の丈の豊かさを大切にしたいのです。コロナ禍は3密回避を求め、人間同士を遠ざけようとする。ならば、私たちは今一旦立ち止まり、私たちが求める豊かさとは何かを一人ひとりが自問する。それがコロナ禍のメッセージのように思うのです。

喜びも悲しみも分かちあうまちへ

「誰々さん死んだて! 知らなかった…」、ある日の青空カフェでの会話でした。今は家族葬や密葬が増え、近隣の方々のお別れの間、地域住民が共に悲しみあう場が失われました。そこで悲しければ一緒に泣こうと、それが「どんと祭」の始まりでした。年末の夜、広場にみんなが集い、その年に地域で亡くなった方の名を挙げて一本一本蠟燭を灯して合掌します。直後に花壇のイルミネーションを点灯し、焚き火を囲み年越しそば、そして最後に熱々の焼き芋を食べるのです。

こうした広場の日常もコロナ禍でことごとく休止。だからこそ私個人は、状況で消滅する行事でなく、移ろえども繰り返される風景のように、いつも自然に身の丈であり続ける広場、そして人生や社会であってほしいと思うのです。

Video message



変化の激しい地域で、公園を核にまちと人の想いをつなぐ

吉見孝信 (北大江地区まちづくり実行委員会委員長)、
三木啓正 (都市空間企画研究所代表)

歴史的な要素が色濃い地域

吉見 昔、私の父とか祖父が言っていたのは、この地域は大阪で一番上り詰めた場所であると。だから油断したら振り落とされてしまうので「しっかり頑張りや」ということでした。どの時代でも、その時代のパワーのある人たちがこの地域を目指してやって来たようです。だからというか、現代でも、ここは今も人の出入りが、かなり激しい地域です。

三木 ここ北大江地域は、上町台地の北の端。太古の時代には、周囲は海で、上町台地が半島のように突き出していました。その半島の東側の河内湾が、だんだんと潟になり、陸地になって、今の台地になってきました。

この台地の北に大川が流れています。仁徳天皇が、その大川を開削したとされ、天然の港ができ、そこから遣隋使が派遣されました。また、後の時代には京都から熊野詣でをする道で

したし、「源氏物語」では明石に流される源氏が通るルートでした。「平家物語」では義経が渡辺の津から出発しています。江戸時代には、八軒家浜の船着場があり、そこへ京都からの船便が着いたという場所、歴史的な要素を色濃く持っているのがこの地域です。

公園の北側には古い石垣がありますが、改修の意見交換のなかで、上町台地の先端の見通しのある場の特性のほうを大事にしてはとの声が強く、石垣の上の広場を一体的に使えるようにして活動につなぐ方向を選びました。



Video message

池永 続いては、松野農園から、吉岡さんにオンラインで登場いただきます。

3 Zoom online

池永 これからの展開についてはどう考えておられますか。

吉岡 繰り返しになりますが、顔が見える関係を緩やかにつくっていけたらいいなと思っていて、人が人を連れてきてくれるような場所にしていきたいというのは、コロナ禍の前からで、今もそう思っています。

人の動きが大きな地域のまちづくり

吉見 この地域では、5年ごとぐらいで人がガラッと変わっています。地域で有名な「都住創」などでも、すでに第3世代が入ってきていて、その人たちが活動しているのですが、民間のマンションはもっと変化は激しいですね。

新しく入って来られた若い人たちが、どこで最初に出会うかという、やはり子どもを抱えての公園です。そのときに、ここにはどんな地域性がある、誰と話をし、どういうことをしたらいいのかという相談も受けます。

働いているお母さんたちが多いので保育園なども増え、自分たちも使っているからということで、最近公園に対するご協力も多くなっています。

三木 当初、住んでいる人だけでなく、行政も企業や学校も巻き込まなあかんでという話で、私自身、今の組織をつくることからお手伝いをして、この地域で活動を始めました。そのときに、この公園があまり地域の人に使われていないということがあり、まずはみんなで公園の花植えをしたり、掃除をしたりということから始めよう



「北大江 あったか まち祭り」では防災の取り組みを様々なかたちで楽しく体験。

ということでした。

動き始めると、それを見て、ちょっと応援してみようかというふうな動きも出てきて、やがて公園をみんなでワークショップで改造しようということになり、芝生広場ができるような公園改造につながった。すると使う人も増えてきて、コンサートをやってみようであるとか、冬のイベントをやってみようであるとかになっていきました。

今は見通しが良く、いろんな人が活動しているのがよくわかるということとで評価される公園になっています。

公園づくりはこれからも続く

三木 人の入れ替わりが激しいまちで、そういった公園改造などの取り組みが進んだのは、役所の担当者とか地域のメンバーとかのめぐり合わせが良かったとき。そのめぐり合わせのチャンスを増やすという意味では、こういった公園の活動がとても重要です。イベントなどで、人と人が接することが次の活動の展開につながっていくと思っています。

吉見 開かれた公園というテーマで第2次改造までやりました。

結果として、この公園が安全安心で、あまり制限もなく受け入れられるのはとてもありがたいと、利用される方はみなさんそうおっしゃる。私たちの側も、地域に対しての貢献を少しでもしていただければ、いくらでもオープンに受け入れますよという、スタンスを心がけています。

Video message

吉見 津軽三味線の音が聞こえますか？こちらでコンサートやっています。ただ、人が集まりすぎて、密にならないように、前もっては、開催場所をお知らせしないで実施しています。

池永 お二人の知人で、もとは国交省の近畿地方整備局におられました石塚さんに参加いただいています。オンラインで、久しぶりだと思いますけど、いかがでしょう。

石塚昌志 以前に公園改造の勉強会でもご一緒させていただきしました。いろんなアイデアが出て、すごいなって思いました。住民側だけでなく行政側の両面を見ながら、自分たちもそこで楽しんだりするんだから、感心しました。お世話になって非常に良かったと思います。私たち

も仕事の頑張りがいがありました。

吉見 公園が良くなって、皆さんも自分の公園だと思って大事にするのですが、そういう面ではやはり使って愛着を得てきたということじゃないかと思いますね。

池永 これが、今回の最大の挑戦である、3元中継も成功です(笑)。



池永 最後のコメンテーターは、宮野さん。北大江公園でも一緒に活動もされています。仕事場から、リモートでお話をいただきます。

6 Zoom online

池永 宮野さんのご家族は、先ほどの吉見さんとか三木さんとかとも交流されていますね。子どもたちから見たら、その方たちはどう見えるのでしょうか。

宮野 普通にまちの人たちのおひとりですね(笑)。お米は吉見さんところに行かせていただいているので、子どもたちが「お米ください」って。顔も見知ってもらっています。

池永 子どもさんにとったら、地域でいっぱいイベントがあるという感じですね。

宮野 そうですね。この地域にはいろんな魅力的な祭りもありますし、北大江公園のイベントやコンサートもあります。

池永 公園の使い方とか、その位置付けはどんな感じですか。

宮野 今、子育て世代が増えているので、保育所なども増加しているので、午前中は入れ替わり立ち替わりに使われています。午後からは子どもたちが使っていますが、子どもが増えてきているので、やはり狭くなってきたという話です。

池永 「北大江地区防災計画」という立派なパンフレットがありますね。よくこういうのは作ることが目的になってしまっていることが多いのですが、ここでは普通の行事や日常があって、その中にうまく組み込んで、現在の活動につながっているような感じするんです。



宮野 そうですね。例えば、北大江公園の冬の「北大江 あったか まち祭り」というのが、基本的には防災のための取り組みですけれども、私や子どもたちは、全くそんなことを考えることはなく、「消防車くるんやて」とか言いながら楽しんで行きます。そんななかで消火器の使い方であるとか煙の体験であるとかができる、すごくいいなって思っています。



子育て世代の交流から、まちづくりの担い手へ

宮野順子 (中大江学童保育保護者会会長、武庫川女子大学准教授)

「都住創」への入居と地域のネットワーク

私が今いるのは、コーポラティブハウス「都住創」内の自宅兼仕事場です。子育てをしながら仕事をするので、住宅との併用でリノベーションできるところを探して、ここに出会いました。

都市住宅を自分たちの手でつくることを目的にしてできた都住創ですが、上町台地を中心に20棟ほどあり、40数年の歴史があります。この場所で一緒につくりませんかと賛同者を集めて、話し合いながら建設するものですが、住宅の中はそれぞれが自分の好きなようにできます。私は中古で購入しているので、一緒に建設はしてないのですが、既にいらっしゃる居住者の方の仲が良いので、そこに混ぜてもらっているという感じ。安心して住むことができます。

この地域では、昔からのネットワークが人間関係の下敷きになっていると感じます。しかし閉鎖的というわけではなく、まちづくりをされている方や昔からずっと住んでいる人たちが、私たちを上手く取り込んでくださっているという感じがします。

「まちと育つ」、学童保育のチャレンジ

上の子が小学校に入るときに、この地に学童がないことがわかって、もうひとりの保護者の人と協力して学童保育を始めました。その時に考えたのは「まちと育つ」ということでした。現場においては、若い子育て世代をただのお客さんにしないで、どう主体になってもらうかが課題と考えていました。

そこで保護者同士と一緒に育って、楽しみたいと思い、当初から保護者同士の交流を大事にしています。子育て世代の

つながりができて、そこからまちづくりの担い手としても活躍してもらえ、るんじゃないかという思いもあり、公園のお祭りに参加したり、清掃に加わったりと、できることをやっています。

コロナ禍で学童はとても影響を受けました。非常事態宣言が出た頃は、自粛をお願いするかたちで1日の利用者が2、3人に。それでも、子どもたちの気持ちの拠り所となるものということで、Zoom 学童を試したりもしました。試行錯誤を続けましたが、そういうのが合う子もいれば、合わない子もいます。最初の頃はスタッフもユーチューバーみたいにならなきゃと頑張っていたのですが、続けていくうちに、あまり無理しなくてもいいと感じました。つないでいる状態で、折々に、「〇〇ちゃん!」と呼びかけて、やりとりするというやり方。学童と家の空間がつながったような感覚です。

まちに住まう文化を次の世代にも

次世代に手渡していくレガシーというものがどこまでできるのかは、まだまだ未知数ですが、学童とか、それを通したまちづくりを続けるなかで、子どもたちは、自分たちが自分たちのまちをつくらうとしている姿をちゃんと見てくれていると思います。その子どもたちが大人になっていくと、きっと次の世代につながっていくだろうと感じていますし、そこから、まちに住まうという文化をつくっていけたらいいなと思っています。



6 Zoom online

池永 次に池田さん。現代アーティストとして、今日のイマジン・トークに臨んで、過去と現在から何を感じ、未来に何をリレーしたいかをお話いただきます。

どのような未来を築いていきたいか？ 池田真優

2025年を芸術・社会・文化の大きな時代の分岐点として、みんなで新しい時代を築いていきたい。万博は半年間で終わってしまうが、会場だけではなく、会場以外の所でみんなが主役になって、若い人たちも意見を出し合って一緒に万博時代をつくりあげていく必要があると思います。

世の中の全員がアーティストであり、時代の創造者です。今は情報革命の真っ只中で、情報には誰もがアクセスできる。だからこそ、それをどう理解し、どう編集するのが大事になっていく。これこそが、時代をつくり上げていく私たちにとって最も大切なことだと思います。

未来の世界を命輝ける社会とするには

今の社会では、一人で不安を抱え込んで、どうにもなくなる人も多いのでは？「人とのつながり」を社会でどうつくっていくのか、命輝ける居場所をどうつくっていくのか。限られたコミュニティだけではなく心の拠り所となる「つながり」を社会にどうつくるのが大切になってくるでしょう。

私はアートを通して人とのつながりの場を構築していきたい。技術は、人間の本質をおさえた上で取り入れる必要がある。テクノロジー革命の時代だからこそ、本質を捉え直すことが大切になると思います。



日本が「再起動」するため

コロナ禍の今から数年後の大阪・関西万博は、禍(わざわい)からの復興の大博覧会となるのではないかと考えています。

私はこれを復興・日本再起動のための一つの時代の幕開けと捉えたい。

ルネッサンスの前、ヨーロッパではペスト大流行があり、全人口の3分の1から4分の1を失ったそうです。過去から本質を学び、危機を乗り越えようとしたルネッサンス。コロナ禍が全世界で起きた2020年と状況が似ているのではないのでしょうか？

アートの役割は社会と技術を「つなげていく」こと。デザインには、物質的デザインと精神的デザインの二要素があります。モノが役割を果たすには、機能性(技術など)が不可欠ですが、一方で、どのようにしてそれをモノに埋め込んでいくかを考えるのがアーティストの役割だと思っています。

大阪は挑戦者のまち！

大阪は挑戦者である起業家たちによって発展してきたまちであり、「覚悟」を持った者たちを受け入れる土壌があるところ。70年の大阪万博でも、「芸術は爆発だ」という言葉が印象的な岡本太郎氏がいました。空へと貫く太陽の塔は、中央集権的でなく、個々の考えを持ち、きちんと愛を持って主張できる人たちが住む大阪だから実現できたのだと思います。

芸術に大切なのは、「純粋な美しさ」で

あって、上っ面ではない。破壊していく、打ち破って限界を超えていこうとする、そんな泥臭い姿が美しい。「本気で世界を変えるんだ」そう覚悟し挑んでいく。芸術家・起業家・哲学者などは、今までの社会常識と闘っていかなくてはならないと思います。

70年の大阪万博が50年を経てなお、大阪の人々の魂に残り続けているようで、今も大阪のまちの至る所で当時の熱量を感じるの、かつての万博の展示には「挑戦者の魂」が宿っていたからなのだと思います。賛否両論ある作品を受け入れ、それを今もシンボルとして残し続ける。そんな大阪に、私は世界中で一番可能性を感じています。

心を重視する世界への変化を

太陽の塔は建物の内側も素晴らしい。塔の天井に向かって、生命の樹がグンと伸

びている。生命の樹の上には、様々な生物の進化が表現されている。そこには、「生きる」という「エネルギー」がある。太陽の塔の内部はエネルギーに満ち溢れている。

未来を築いていくためには、歴史や伝統文化から受け継がれてきたものの本質を学び、それを時代に応じて編集していく表現力が必要だと思います。

2021年のダボス会議のテーマが「再起動(グレート・リセット)」。世界は経済重視の資本主義から、人間の心の幸福に目を向けるように変わってきている。コロナ禍により、愛、心の幸福、平和といったものの大切さを全世界の人々は実感している。

コロナ禍が収束しても元の経済重視社会に戻ってしまうのではなく、人の心、幸せに目を向けるように社会全体が変化、進化していくことが大事ではないかと思います。



池永 熱いご意見でした。橋爪先生、いかがでしょうか。

橋爪 万博を評価するのは難しいものだなと思います。大阪の歴史を考えたとき、第五回内国勧業博覧会の成功があるわけですが、ただ、私には、この博覧会の成功体験をそのまま引き継いでしまっただけかという引っ掛かりがある。70年万博も、成功しているのだけれど、単純にそうだとはいきってしまっているのかもしれない。だからキーワードの最後で、「また負け戦だったな」を挙げた(笑)。

70年万博のブレーンとして活躍した小松左京も、『大阪万博奮闘記』(新潮文庫)とかをみると相当苦労しているわけです。小松は万博協会の委員を要請されるのだけれど、その時に岡本太郎の下だったらやってもいいと言ったそうです。岡本太郎は、外からの要求を全部はねつけるわけです。あの人は岡本一平と作家の岡本かの子の息子だからね。反骨精神も旺盛。私自身も同様で、割とひねくれ者なので、そう簡単には喜ばないというところがある(笑)。

池永 第五回内国博は、それまでと比べ、爆発的に入場者数が多くて大盛況だった。

橋爪 第四回が京都にとられるわけです。京都は平安遷都1100年で平安神宮をつくった。それで大阪は後回しになる。ところがその頃、国際的な博覧会の条約を日

本が締結するので、第五回から海外のパビリオンが展覧できるようになった。結果として、日本における正式な国際博覧会の第1回目は実は第五回内国勧業博覧会。その時の成功が、どうも後にまで引っぱられているんじゃないかとも感じる。

池永 戦後、1948年の復興大博覧会もそうでしたが、その時代の大阪というか日本人に向けたイベントになったのではないかと思います。その意味では、コロナ禍後の2025年万博というのは、やはりその時代に何かをもたらすことになるかも知れない。私はその可能性を信じたいですね。

風土が変われば、感性が磨かれ、文化が生まれる

池永 今日、みなさんのお話をうかがってきいて、風土が変われば、感性が磨かれ、文化が生まれるということを感じます。風土というのは土地の気候とか地形とか自然とか、あるいは建物とか組織とか制度とか精神環境なども挙げられますが、今日のお話のような、井戸とか水とか公園とか農園という場を変えることによって、まさにそれが感性を磨いて、文化につながる。その土地の人々とか企業としての考え方、行動様式とか企業文化とかにも影響してくるのではないかと感じました。

大阪のまちも、以前と比べたら大分変

わってきているのではないかと。まさに今日のような地道な活動が、さらに深いところで、感性が磨かれ文化をつくっているのではないかと思います。

最後に、大阪ガス エネルギー・文化研究所所長の金澤成子からひとことご挨拶させていただきます。

金澤 みなさま、ありがとうございます。今日のフォーラムのような、たくさんの刺激やヒントをいただける場で、私どもも本当に勉強させていただいています。



橋爪先生のお話にありました「大大阪」というキーワードが、私には「好き」という言葉を加えて、「大好き大阪」とも感じられました。これを次の世代、子どもたちにどうつないでいくのかが大きな課題。私たちが大好きな、この地域をその次の世代にも大好きであって欲しいと思います。

情報誌「CEL」最新号のテーマは「未来を創る 新しい都市のかたち」です。みなさんとともに大好きな大阪の地で、持続可能な社会の実現に向けて、今後も研究活動を続けていきたいと思っています。

